

詩における「西風」の心理学的考察

— ペトラルカ、立原道造の詩を通して —

堀 口 真 宏

要 旨

本論文は、西洋と日本において特に「西風」を取り扱ったペトラルカ、立原道造における2つの詩を通してどのような点に特徴があるかを検討した。また、2つの詩で取り上げられていると考えられるメタファーについても考察を行った。西洋における西風は、春を告げる風として捉えられている一方で、日本における西風は、秋に吹く風として意味づけられており、一抹のさみしさを表現することばとして用いられていると考えられた。それに加え、双方の詩は、一見すると、メタファーを通じて季節の移ろいを歌った詩とも捉えられるが、その背景には作者のこころの内側を表現した二重、三重にもなるメタファーが存在する可能性が考えられた。さらに、心理療法におけるメタファーについても考察を行った。

はじめに

本論文で提示する詩との出会いは2つの楽曲からである。まずは、ペトラルカによる詩とMonteverdi, C.(1614)による作曲のマドリガル（無伴奏混声合唱）第3集第6巻による楽曲である。テンポ良い響きと美しいメロディが印象に残っていた。一方の曲は、立原道造による詩と三善晃作曲の「三つの抒情」から「或る風に寄せて」という楽曲である。このような2つの西風を題材にした楽曲をもとに、本論文では、まず「西風」など風にまつわるギリシア神話について概観し、西洋と日本において特に「西風」を取り扱った詩にどのような点に特徴があるかを検討する。その際に、また、2つの詩で取り上げられていると考えられるメタファーについても考察を加える。

風の神々— 4つの風神 —（表記の綴りが文献に拠って異なるが以下にそのまま示す）

西風は、日本語大辞典（1989）では、「西のほうから吹いてくる風。せいふう。にし。」と示されている。一方、英語ではZephyrと記される。ギリシア神話に登場するZephyrus、西風の神の英語名とされ、西風の意味をもつ。そこでは強風ではなく「そよ風、優しい風」を表す。松村他（2013）によると、「ギリシア神話における西風の神。春の初めに吹く、草花を育む穏やかな風。アストライオスと曙の女神エオスの子で、ボアレス（北風）、ノトス（南風）、エウロス（東風）の兄弟。」とされる。また、ギリシア神話（1996）によれば、「風の支配領域は、夜明けエーオースと星空アストライオスとの間の、4人の息子に分配された。彼らの名は、北風ボレアース、西風ゼピュロス、東風エウロス、南風ノト

スであった。ボレアースは、トラキアの山中に住んでいた。イーリスが、パトロクロスの火葬の薪を煽いでもらうため、彼を探しにきたのも、ここであった。ボレアースは、エレクトエウスの娘オーレイテュイアをイーリッソス河の岸辺から連れ去り、彼女との間に7人の子供を設けた、といわれている。」と示されている。以下、その4つの風神について概観する。

1. 北風：Boreas、ボレアース（図1参照）

松村他（2013）によると、ボレアースは「曙の女神エオスと星の神アストライオスの間に、西風のゼピュロス、南風のノトスを兄弟として生まれた北風の神。穏やかな西風に対し、激しい冬の北風。（略）アテナイ人らは、大風により国家を護ってくれる神としてボアレスの神殿を設け祭礼を行った。」と記載されている。

また、ギリシア・ローマ神話事典（1988）によると、「北風の神。空の神々であるアストライオス（星の神）とエオス（曙）との息子。トラキアの生まれといわれる。しばしばゼピュロスと対比される。ゼピュロスは西風の優しさを象徴するが、ボレアースは暴力的な荒々しさを表す。神話では彼はアテナイ王エレクトエウスの娘オーレイテュイアに言い寄ったという。彼女はそれを拒絶したが、あるときボアレスはイリュッソス河畔の草地で踊っている彼女をみると、雲で包んでトラキアへ運んだ。彼女は彼の翼ある2人の息子カライスとゼテスを産み、また2人の娘キオネとクレオパトラを産んだ。のちになってアテナイ人はボアレスを自分たちの守護神の1人と考えて、ペルシア戦争に際して彼に犠牲を捧げた。ボアレスは馬と深い関係があるとされ、しばしば馬の姿で描かれている。彼はダナオスの牝馬と交わって12頭の子馬の父となった。」と示されている。



図1. ステファノ・デラ・ベラ (Stefano della Bella) Boreas and Orithyia, from 'Game of Mythology' エッチング 印刷 4.7 × 5.9 cm 1644年 ニューヨーク メトロポリタン美術館

画像出典：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/07/Boreas_and_Orithyia%2C_from_%27Game_of_Mythology%27_%28Jeu_de_la_Mythologie%29_MET_DP831075.jpg?uselang=ja
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Boreas_and_Orithyia_from_%27Game_of_Mythology%27_\(Jeu_de_la_Mythologie\)_MET_DP831075.jpg?uselang=ja](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Boreas_and_Orithyia_from_%27Game_of_Mythology%27_(Jeu_de_la_Mythologie)_MET_DP831075.jpg?uselang=ja) (2022年10月24日アクセス)

次に、ギリシア・ローマ神話文化事典（1997）によると、「北風の神格化されたもの。エウロス、ノトス、ゼピュロスと同じく四大風神の一人。（略）エレクトエウスの娘オレイテュイアを誘拐し、大勢の子供を作った。キオネ（雪）、アウラ（そよ風）、ゼテス、カライスである。ゼテスとカイラスはボレアダイとも呼ばれる。ボレアスの住まいはギリシア人にとって極寒の地、トラキアである。彼は風の中で一番強く、ホメロス以来多くの詩人がその激しさを歌ってきた。彼は翼のある老人の姿で描かれる（図1参照）。髭を生やし、髪は雪で覆われ、上着は常に風にはためいている。」と記されている。

このように、北風ボレアスは冬を運んでくる冷たい北風の神と示されている。また、激しい冬の北風として激しい、荒々しいイメージをもつ神と考えられる。

2. 南風：Notos、ノトス

南風ノトスは、ギリシア・ローマ神話事典（1988）によると、「南風の神で、ふつう北風の神ボレアスや西風の神ゼピュロスの兄弟といわれる。一般には穏やかさと暖かさの擬人神だが、秋に嵐をもたらす作物をだめにする者として恐れられた。」また、ラルース ギリシア・ローマ神話大事典（2020）によると、「南西の風神。アストライオスとエオスの息子。ローマ人はノトスをアウステルと呼んでいた。ノトスは雨を告げる風神。額は雲で覆われ、髭は雨に濡れていた。」の記載されており、ギリシア・ローマ神話辞典（1993）によれば、「南風神。ローマのアウステル、曙女神エーオースの子。ゼピュロス、ボレアス、暁の明星などの兄弟。」と述べられている（図2参照）。



図2. ヤン・ダルゲン (Yan' Dargent) Notus (chapiteau antique).

Illustration de "Histoires des météores", p. 153 1870年

引用画像：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/bc/HistoireDesM%C3%A9t%C3%A9ores_-_p153-2.jpg?uselang=ja

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:HistoireDesM%C3%A9t%C3%A9ores_-_p1532.jpg?uselang=ja
(2022年10月24日アクセス)

3. 東風：Euros、エウロス

東風エウロスは、ギリシア・ローマ神話（1988）によると、「南東風、あるいはもっと漠然と、東風の神。他の風の神々と同様に、アストライオス（「星明り」）とエオス（「曙」）との息子。彼は荒れ狂いながら雨をもたらすと考えられていた。ローマ人たちは彼をウォルトゥルスとも呼んだ。

また、ラルース ギリシア・ローマ神話大事典（2020）によると、「アイオロスの息子で、東風の化身。ウォルトゥルスとも、またローマの船乗りの間では、『太陽の近くに生まれた』という意味のサブソラスとも呼ばれる。」と示されている。

4. 西風：Zephyros、ゼピュロス

ゼピュロス（Zephyros）は西風の神である（図3参照）。英語ではゼファー（Zephyr）と示される。フランス語とロシア語ではゼフィール（Zéphyr）。の中で最も温和なゼピュロスは、春の訪れを告げる豊穡の風として知られている。ゼピュロスはトラキアの洞窟に住み、ポダルゲーによって、アレキレウスの名馬バリオスとクサントスの父となった。クローリスを妻とし、カルポス Karpos <実り>を生んだ。彼はときにイーリスの夫ともされている（ギリシア・ローマ神話辞典、1993）。また、図説ギリシア・ローマ神話文化事典（1997）によると、「エオスの息子。この若い神は西風の人格化で、時には心地よく、時には雨を降らして春の訪れを告げる。岩の上に立たされていたプシュケをクビドの宮殿まで運んだのは彼である。ローマ人は彼をファウニウスと呼んだ。普通名詞の<ゼピュロス>は、穏やかで心地よいそよ風のことであり」と示されている。

ギリシア・ローマ神話事典（1988）によると、「西風の神。アストライオスとエオスの息子の1人。（略）一般に西風は風の中で最も穏やかで歓迎される風として考えられ、しばしば好ましいものとして北風ボアレスと比較される。プシュケと乗せてクビド（エロス）の城に彼女を運んだのもゼピュロスである。彼の妻は時には女神イーリスであると言われる。」また、ギリシア神話（1996）では、「ボアレスの日常の仲間はゼピュロスで、もとは、その域で春の花が開く優しい恵深い風ではなかった。彼の兄弟のように、彼は、荒々しい有害な風で、嵐を起こしたり海の波を突き上げたりして楽しんでいった。ボアレスと共に、彼は、山ばかりのトラキアの山中の洞窟に住んでいた。（略）後になって、ゼピュロスの激しい性質は柔らいだ。彼は、キーリュシオンの至福の野を優しく吹く、かぐわしい風となった。妻として、彼は優雅なクローリスを与えられ、彼女との間に息子ケルポスつまり果実をもうけた。」と記されている。図3は、有名な絵画「ヴィーナスの誕生」である。この絵画は、ヴィーナスが誕生後にキュプロス島に上陸したシーンを描いているといわれている。貝殻に乗ったアフロイデの左側には花が撒かれており、左上にはゼピュロスとその妻が描かれており、愛の象徴である（吉田、2013）。

このように、東西南北の風神について記述してきたが、北風ボアレスは冷たい冬の空気を運ぶ、激しく強いイメージ、南風は力強く、雨を降らし、晩夏と秋を運ぶ神、東風も雨をもたらす神として記述されている。また、4つの風の中で、東風のみが季節を示した記載が見当たらない。そのような中、西風は春のそよ風を運ぶ比較的穏やかで優しいイメージとして描かれていることが伺える。



図3. サンドロ・ボッティチェリ (Sandro Botticelli) 「ヴィーナスの誕生」 1485年
 テンペラ キャンバス 172.5cm × 278.5cm フィレンツェ ウフィツィ美術館
 画像出典：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/da/La_Venere_di_Botticelli.jpg
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:La_Venere_di_Botticelli.jpg?uselang=ja
 (2022年10月22日アクセス)

ペトラルカ・立原道造における詩の比較

西風の詩にまつわる作品についての論文は、P. B. シェリーの「西風に寄せるオード」について池田(2019)、「西風の見たもの：上代日本における中国詩文」内田(2011)などが散見されるが、西風の詩をテーマにした論文は少ない。本論文では、西風を題材にした詩に着目し、西洋と日本において特に「西風」を取り扱った詩にどのような点に特徴があるかを検討する。また、2つの詩で取り上げられていると考えられるメタファーについても考察を加える。以下、ペトラルカ、立原道造における2つの詩を示す。

Petrarca Canzoniere II 310

Zefiro torna

*Zefiro torna, e' l bel tempo rimena,
 e i fiori e l'erbe, sua dolce famiglia,
 e garrir Progne, e pianger Filomena,
 e primavera candida e vermiglia.*

*Ridono i prati, e' l ciel si rasserena;
 Giove s'allegra di mirar sua figlia;
 l'aria, e l'acqua, e la terra è d'amor piena;*

ogni animal d'amar si riconsiglia.

*Ma per me, lasso!, tornano i più gravi
sospiri, che del cor profondo tragge
quella ch'al ciel se ne portò le chiavi;*

*e cantar augelletti, e fiorir piagge,
e'n belle donne oneste atti soavi
sono un deserto, e fere aspre e selvagge.*

ペトラルカ カンツォーニエーレ 池田簾訳 第二部310より

西風がかえり

ゼフェロス
春風は蘇り 蒼空を連れてくる、

花々 千草 楽しい一族共々に

つばめ 燕は啼き ピロメーラ そして夜鶯は涙に昏れ

純白の春 深紅の春がたち返る。

あちらこちらで牧場が笑う 大空は晴れ
ユピテルはご機嫌で 娘ご眺め、
大気も 水も 地も 愛に満ちみち
生きとし生けるもの 心ときめく。

されど悲しきかな われに蘇るのは重い溜息
われらの鍵を 大空へ持ち去れるかの女が ひと
胸の奥から呼び覚ます あまたの溜息、

小鳥のさえずり 花咲く丘の辺

佳きひとたちの 清らかに優雅な身ぶり

それら総てはわれには砂漠 猛り狂う野の獣。

この詩は14行のソネット形式で構成されている。Zefiroとは前述の通り西風のことを指す。訳では春風と示されているように、春の訪れを連れてくる風をして表現されていることが伺える。長く続いた冬の時期に終わりをつけ、ようやく春が始まるといった雰囲気や「蒼空」「花々」「千草」「楽しい一族」などのことばからも伝わってくる。鳥は啼き、生命力にあふれた印象をもつ。楽曲の方も、テンポよく、爽やかであり、気持ちがたかぶるようなニュアンスが伝わってくる。ここで、「Progne」は

ギリシア神話の中で、アテネ王パンディオンの娘プロクネーのことを指し、神々の祈りによって燕に変身した。「Filomena」はプロクネーの妹であり、夜鶯に変容させられたピオメーラとされる（池田、1992）。このように、神の力で「燕」と「夜鶯」に変身したというギリシャ神話をもとに示されていると思われる。また、「Giove s'allegria di mirar sua figlia」の部分、「ユピテルはご機嫌で 娘ご眺め」は一見すると、意味を把握することが難しい。池田（1992）によると、「ユピテルは木星で、全能の神ゼウス、その娘のヴィーナスと共に仲良く春の夜空に煌めく」とある。つまり、春の空には、木星と金星が輝いているという意味に捉えることができるといえる。

このように詩の前半は、春の到来を表現する西風により、草木や花、鳥たちが鳴き、空には星が輝いているといったトーンで記述されているが、8行目からは一転して「されど悲しきかな われに蘇るのは重い溜息」ということばからも悲しみに満ちた印象をもつ。「われらの鍵を 大空へ持ち去れるかの女(ひと)が胸の奥から呼び覚ます あまたの溜息」とあり、誰か大切な人を失ったのであろうか。池田（1992）は、評釈、大意の中で、「詩人ひとり最愛のひとを失って愁嘆にくれる。」とある。また、続けて、ペトラルカの詩がイタリアで新風を吹き込みいち早く認められるようになったのかについて以下のように述べている。

それは、何よりもまず、詩人の永遠の恋人のラウラ (Laura) の「名前の発見」にあったと、わたしは思う。偶然の出会いであったか、創作上の熟慮の末であったかはいま不問に付すこととして、ラウラという名前はじつに美しい響きをもつ。そしてこの名から、小石が池に波紋を呼ぶように、豊かな連想が広がる。恋人のラウラは「微風」であり、ラウロ (lauro) = 「月桂樹」であり、またアウレオ (aureo) = 「黄金の」とも結びつく。それらがさらに連想の環となって、「ゼフィロス (西風)」、あるいは「桂冠」、そして「金髪」や「太陽」というふうには波紋を広げる。

と述べている。このようなことから、作者にはラウラという恋人がおり、その名の持つ美しい響きから、「微風」さらには「西風」という意味につながるということであろうか。そのことに関連してかは不明だが、前半の詩の語句「torna」「rimena」「famiglia」「Filomena」「primavera」「candida」「vermiglia」の語尾がLauraの語尾「a」と重なっているように思われる。また、語尾が「ena」と「glia」が一行おきに示されており、韻が踏まれているとも思われるが、今回は割愛する。

恋人のラウラは「微風」であり、そこから連想が「西風」にもつながると書いてあることから、西風がかえり「zefiro torna」という詩は恋人ラウラのかえりを願うというメタファーとして捉えることができるかもしれない。春風のようなラウラとの日々は今はなく、この世を去ってしまった中、重い溜息にひたっている。その中で、最後の一行である「それら総てはわれには砂漠 猛り狂う野の獣」はそれまでのトーンよりさらに重々しく違った印象を受ける。

この一文はなにを意味しているのだろうか。池田（1992）によれば、「砂漠」は「沈黙の荒野」「獣」は「恐怖の対象」と示している。これらのことばから、春の訪れを示すような小鳥のさえずりや花咲く丘、ひとたちの清らかに優雅な身ぶりは、作者にとって花々が咲く草原ではなく、それらは溜息の

中にある沈黙の荒野であり、恐怖であるという意味ももつものかもしれない。つまり、恋人ラウラが亡くなった今、彼のところの中には絶望がまるで「猛り狂う野の獣」のように押し寄せているようにも捉えられる。

この詩は、前半の詩だけを読むと zefiro 西風が春風を指すというところからも、やっと訪れた春をメタファーとして表現しているようにみえる。しかし、そこには恋人ラウラの存在があり、zefiro のような彼女の存在はもうない。作者の内側の心情を「砂漠」「獣」といったことばによって表現している。このことから、一見すると、季節の移ろいを歌った詩とも捉えられるが、その背景には作者のこのころの内側を表現した恋愛における詩であるということが考えられる。つまり、「zefiro = 春風 = ラウラ」についてのみならず、「zefiro = ラウラ = 失った人」について表現していた可能性があるとも考えられ、西風が二重、三重にも織りなすメタファーとして表現されているとも考えられる。

立原道造 「暁と夕の詩」より

或る風に寄せて

おまへのことでいつばいだつた 西風よ
 たるんだ唄のうたひやまない 雨の昼に
 とざした窓のうすあかりに
 さびしい思ひを噛みながら
 おぼえてゐた おののきも 顛へも
 あれは見知らないものたちだ……

夕ぐれごとに かがやいた方から吹いて来て
 あれはもう たたまれて 心にかかつてゐるおまへのうたつた とほい調べだ—
 誰がそれを引き出すのだらう 誰が
 それを忘れるのだらう……さうして
 夕ぐれが夜に変わるたび 雲は死に
 そそがれて来るうすやみのなかに

おまへは 西風よ みんななくしてしまつた と

西洋では、西風が春を告げる風というイメージであることが先ほどの詩からも見てとれる。春がやってきて、木々や花々たちが芽吹く時期として気持ちも高ぶる様子が伺える。このように、西風は、西洋によって春を告げる風として捉えられている可能性がある。一方で、日本における西風は、秋に吹く風として意味づけられており、一抹のさみしさなどを表現することばとして用いられている可能性がある。

「おまへのことでいつばいだつた 西風よ」の箇所、おまへは西風を指す比喩をして見て取れる。そのあとに「雨の昼」「とざした窓のうすあかり」「さびしい思い」と続くことから、秋雨の中、「閉ざしたまどのうすあかり」と「さびしい思い」を重ね合わせているとも思われる。また、「おののきも顫へも」とある。なにかに恐怖を覚えて震えていたことをおぼえているという意味なのだろうか。「あれは見知らないものたちだ」と続くが、「あれ」に対して恐怖を感じていたともいえる。ただ、ここでは「あれ」が何のことを指すのかわからない。

その後、「あれ」は「夕ぐれごとにかがやいた方から吹いてきて」とある。この風は西風を指しているのだろうか。ただ、それまでの暗いトーンのことばに比して「かがやいた」などの光を示すことばが使われている。「あれ」は「もうたたまれて」とあり、あれは心のどこかに秘めていて、それは「心にかかつてゐるおまへのうたつたとほい調べだ」とある。「おまへ」は西風を指していることから、西風の「うたつたとほい調べ」というということになるのだろうか。続けて「誰がそれを引き出すのだらう」「誰がそれを忘れるのだらう」とある。それを心に秘めているのは作者であると思われるが、本人の中ではそれはすでに「たたまれている」。「誰がそれを忘れるのだらう」というのは本人が忘れることも指しているのだろうか。

「さうして 夕ぐれが夜に変わるたび 雲は死に そそがれて来るうすやみのなかに」と続く。夕ぐれのががやきは時を経て、夜になり、雲は姿を消す。ここで「死」ということばの登場で再び暗いトーンとなる。誰がそれを引き出し、忘れるのだろうかと考えている間に時は刻々と過ぎ、夜となる。このことは、いつの間にか時がたつにつれ忘れ去られることを指しているのだろうか。最後に「おまへは西風よ みんななくしてしまつた」と記載されている。ここでは、はっきりと「おまへは西風よ」と示しており、「みんななくしてしまつた」綴っている。この「みんななくしてしまつた」というのは何を意味するのだろうか。

立原道造の恋愛詩は1937年までは彼の実生活上の失恋体験をなぞるように悲恋がうたわれた（名木橋、2020）と示されていることから、この詩の中に登場する「おまへ＝西風」は、「西風＝恋する人」とも捉えられるとも考えられる。このようにみると、ペトラルカ、立原道造における双方の詩には恋愛のテーマが背景にある可能性が考えられる。しかし、立原の詩の最後の一文には「みんななくしてしまつた」とある。この一文についてももう少し考察を検討してみたい。

立原道造自身の生活

1937年12月20日、第二詩集「暁と夕の詩」を自費出版した。この詩集について立原は次の通り書いていると立原道造全集5（2010）に記載されている。

失われたものへの哀傷といひ、何かしら疲れた悲哀といひ、僕の住んでゐたのは、光と闇との中間であり、暁と夕の中間であつた。形ないものの、淡々しい、否定も肯定も中止された、ただ一面に影も光もない場所だつたのである。人間がそこでは金属となり結晶質となり天使となり、生きてる者と死したる者の中間者として漂ふ。死が生をひたし、僕の生の各瞬間は死に絶えながら永遠に生きる。すべてのものは壊されつくしてゐる、果敢な清らかな冒険を言ひながら、僕がすべてのものを壊しつ

くしてその上に漂った、と僕の心がささやく。おそれとおののきとが、むしろ親しい友である、尖らされた危い場所だつた、と今の僕は何かさびしげにことあげする」、「一度死んだ者は、二度生きねばならない。生よりも死について知つてゐるからこそ生きてゐられると、もの忘れよと吹く南風をたのむな。決意と拒絶といふ二つの言葉が生きてといふ事実に向かひあふ、生きるとは、限りなく愛し、限りなく激しくあることだと。光が誘ふ。ここに出発点がある、たつた一度の意味で。おまへが死なうと生きようと、僕は生きてゐたいのだ!」。

上述の「失われたものへの哀傷といひ、何かしら疲れた悲哀といひ、僕の住んでゐたのは、光と闇との中間であり、暁と夕の中間であつた。形ないものの、淡々しい、否定も肯定も中止された、ただ一面に影も光もない場所」の部分がある。それは、哀愁に包まれた光と闇の中間、暁と夕の中間とあり、一面に影も光もない場所と綴っている。ただ、その中間に住んでゐたとあるが、再び「おまへが死なうと生きようと、僕は生きていたいのだ!」と最後に述べていることから、生へのまなざしがあると思われる。

立原は、この2年後の1939年に死去している。名木橋(2020)によると、実生活上の事実としては、第一に自身の死を強く意識していた点を挙げている。「前年である1937年の10月には肋膜炎の診断を受け、11月には滞在していた旅館が全焼し死を目の当たりにした(略)1938年夏には肺尖カタルと診断され勤務先を退職している。死が迫る限界状況の中、立原は生の証明として理想の愛を純化しようとしていたものだろう」と書かれている。このことから、立原自身が死を身近に感じていたと考えられる。

続けて、名木橋(2020)は、「1938年における愛の充足を歌った詩もまた『別離』による理想の愛の境地在願われたものと考えられる。その詩想は新生を企図した立原晩年の長崎への旅程にあつても見られたが、体の衰弱で倒れた彼からはイロニーとしての愛が失われ、否定してきたはずの自身の望みうだけの愛が直視されるに至った」と示している。このことから、「別離」により、愛がさらに強固になるものとしてのイロニーが、この時期の立原はそのイロニーとしての愛というよりは、死が身近に迫っていると感じている中で「別離」による愛ではなく、直接的に望む愛にまなざしが向けられていたと考えられる。

「おまへは 西風よ すべてなくしてしまつた」ということばは、「おまへ=西風=恋愛」についてのみならず、「おまへ=自身の生死にかかわる命」について表現していた可能性があるとも考えられ、西風が二重、また何重にも織りなすメタファーとして表現されている可能性は刮目すべき点である。

以上のように、ペトラルカ、立原道造による2つの西風を題材にした詩を取り上げてきたが、西洋では春風、日本では秋風の意味合いをもつ風として表現されていると考えられた。しかしながら、そのような季節感の違いだけではなく、共通点も見られた。それは、詩の背景に恋人の存在があり、その相手に対する表現としても捉えることができるといふ点である。さらに、恋人を指し示す表現に加えて、さらに違った意味をも包含するメタファーとしての可能性が示唆される。

心理療法におけるメタファー

心理療法においてメタファーがとても役にたつことは、心理学のさまざまな分野において意見が一致しているが、科学的な答えは導きだされていない (Niklas, 2017)。特に、メタファーの使用と治療効果の関係になると、はっきりと何らかの結論を出すのが難しい (McMullen, 2008)。しかしながら、治療がうまくいったときの面接には、うまくいかなかった面接と比較してメタファー表現の使用が多い (McMullern, 1989) と示されている。Niklas (2017) によると、そもそもメタファーは、専門家の言語的な道具として優れているかどうかについて議論されるものではないと述べ、続けて合理的に考えれば、どんな話し方や考え方をしても、建設的かどうかにかかわらず、話しているかぎりメタファーはたくさん入り込んでくるだろう。臨床を見ても、そのとおりであると述べている。

クライアントが使うメタファーには、たいていクライアントの問題の中核となるテーマが含まれている (Levitt, Korman, & Angus, 2000; Angus & Korman, 2002; McMullen, 2008)。クライアントがメタファーを用いたら、セラピストはそのメタファーを重点的に掘り下げ、メタファーから連想されるものやメタファーが暗に示すものを調べて、その語の対話でもそのメタファーを積極的に使い続けるべきだということができる (Niklas, 2017)。続けて、「これも、メタファーが言語の礎石だという考え方と一致する。心から溢れ、口をついて出てくるものが、メタファーの形をしていることだって十分ありうる。いやむしろ、メタファーを使うときにはますます『心から』話しているといえるかもしれない。」と述べている。話全体を支配しているメタファーのテーマを見つけると、対話に枠組みが生まれて、その中で望ましい変化を起こせるようになるかもしれない (McMullen, 1989)。

以上のように、メタファーは心理療法において役割を果たしうる可能性があると考えられる。Barker (1985/1996) は、心理療法で使用されるメタファーを「複雑な臨床状況を、包括的に扱うことを目的に作られた本格的な物語」、「特定の限定された目標を達成することを狙いとする逸話や短い物語」、「特定の事項を説明したり、強調したりするためのアナロジー、シミリー、短いメタファーとしての言葉」、「関係性のメタファー」、「メタファーとしての意味を持つ課題」、メタファーとしてのオブジェ、「アートによるメタファー」の7種類を分類している。その中で、メタファーとして扱われるのは、逸話や物語、絵画や粘土などの作品、さらには遊戯療法で使用される家や救急車などのおもちゃといったものに範囲を広げ、それらがメタファーとして使用される余地がある、と述べている。

例えば、心理療法の中でクライアントが発することばに着目して、そのことばがどのような意味合いがなされているのかについてセラピストは耳を傾ける。その中でも精神分析的心理療法においては、クライアントが語ったことばから、象徴的に示されている事柄を受け取り、そこからセラピストはクライアントに対してタイミングをみて解釈を投与する。例えば、「誰かが部屋に侵入してくる夢をみた」と語るクライアントがいたとすると、事実かどうかは別として、クライアントの主観的な体験もしくは無意識の中で、何かがころろの中に入りこんできた、もしくは入り込んでくるありようをメタファーとして表現していると理解する場合がある。一方、子どもの場合は、遊戯療法を実施することが多いが、「遊び」の中からメタファーとして表現されることが多いと思われる。その場合、立場に依るが、

セラピストは解釈という形よりは、メタファーとして表現されたものをメタファーとして返すこともあるだろう。堀口（2010）は、学校の中で特別支援教育支援員として教室で起こった場面を取り上げている。

ある日の図工のときのことでした。周りの子供たちは、お友達と遊んでいる絵や、家族と旅行へいったときの絵などを描いているときに、D君は男の人がナイフみたいなものをもって人をやっつけている絵を描いたのです。そこには血が流れていて、まわりの子どもたちがD君の周りに集まってきて「ワーなんだこりゃ〜！」と騒ぎだしました。担任の先生も慌てだして、困った表情をしていました。

私はD君の傍らに寄って、「これなんなん？」って聞くと、D君は一言「ヒッサツ」と語りました。彼の中で、その絵はテレビの時代劇のことを表したかったのです。つまり、D君が書いた絵は、周囲からは「怖い」「何を描いているんだ」と否定的に評価されたかもしれませんが、D君は実は悪い者をやっつける仕事人のことを表したかったのです。

私は、思わず笑みがこぼれ、「そうかーG君は仕事人なんかな。悪いものをやっつけるんやね」言うと、照れくさそうに下を向きました。

この一場面は遊戯療法の場面ではないが、実際に教室の中で支援を行っている際に生じたものである。この時、D君は血だらけの人を描いて周りの人が大騒ぎして担任の先生も慌て出した。この時、筆者はその描いている絵の背景を理解しようとし、D君が言った「ヒッサツ」が悪いことをしている人を戒める仕事人を表しているメタファーと受け止め、「そうかーG君は仕事人なんかな」とそのまま返している。その背景にある気持ちを担任に伝えることで、先生自身もD君に対する見方に変化が生じ、その後、それまでD君をめぐり、多くの揉め事が起こったという報告は少なくなっていた。

このように、メタファーはクライアントの語りや夢、また「遊び」の中から表現されたものをセラピストが受けとり、クライアントの内面の理解を深める側面があるといえるだろう。そのような点から見てみると、詩においても比喩が多く用いられている。直接的に表現することを避け、作者の内面的でまだ具体的なことばにならない部分をメタファーとして表現する場合もあると考えられる。以下では、詩を用いた心理療法について概観していきたい。

詩を用いた心理療法

表現を用いた心理療法の中でも詩や俳句を用いた詩歌療法というものがある。詩歌療法は poetry therapy を飯森が訳したものである（飯森、1998）。poetry therapy のルーツを辿ると、古代ギリシア神話にまで遡ることができる。アポロンは、芸術を司る神ともいわれ、「神の文化史」（2013）によると、以下のように示されている。アポロンは「ゼウスとレトの息子で、アルテミスの兄弟。ギリシアを代表する神格の一人であり、主神ゼウスと同じように、最もギリシア人の尊崇を受けた。予言、音楽、牧畜、弓術を司るほか、アルテミスと同じく疫病をもたらし、かつそれを防ぐ神。医療、

癒し、清めも彼の宰領するところ。また、音楽、文芸活動がギリシア人の教育において重要だったころもあり、そこから広がって哲学を含め、あらゆる知的活動の守護者となった。」と記載されている。また、アポロンは poetry therapy の先駆者として示されている (Mazza, 1999)。さらに、紀元前 4000 年前のエジプトでは、パピルスに解決策を書き溶かされた文字が、患者によって医療目的で飲用されていたという (大沢, 1978)。日本では、飯森 (1978) をはじめとして、医療領域やデイケアといった様々な領域において、芸術療法の一つとして活用されている。

また、平岩 (2010) は、詩歌療法についての現状についてまとめる中で「詩はある意味世界共通の根源を持つものであり、何ら驚くべきことではない。」と述べている。小山田 (2015) は、「詩歌療法とは、詩を読み、詩を書くことで、鬱積した感情を解き放し、情緒を安定させ、混乱した思考にまとまりを与え、自分や世界についての見方 (認知) を変え、自己を再形成できるように援助する心理療法とすることが出来る。」と述べている。このように、詩は世界共通のものとして捉えられ、心理療法としての意義を見出すことができうと考えられる。

今後の課題

本論文は、「西風」を取り上げた詩について 2 つの作品を通して検討を行った。今後はギリシア神話にまつわる資料についても今後検討を重ねていきたいと考えている。また、2 つの詩で表現されるメタファーについても考察を行ったが、2 人の作者にはまだ多くの作品が残されており、今後検討していきたい。筆者は、文学に対しての専門知識が不十分なため、今度さらなる自己研鑽に努めていき、詩を扱った詩歌療法とメタファーについての検討を行っていきたいと考えている。心理面接に詩を導入した際、詩を通して表現されるメタファーをセラピストがクライアントの問題の本質的なテーマと関連すると理解するとき、その部分を扱うことも心理療法的なかわりが可能になる場合もあると考えられ、今後の課題としたい。

また、小山田 (2015) は、「詩には比喩や隠喩が用いられており、それらを読みとかなければ詩の意味はわからない。しかしながら、詩の解釈は、読む人の感性、知識、体験、その時の心の状態により異なる。それゆえ、詩の解釈には最も正しいものはなく、同じ詩でも読む度に新しい発見があるように、それぞれが正しいことを理解しておく必要がある。」と述べている。このように、本論文では、前述のような考察を行ってきたが、それぞれの読む時期、体験などによってまた違った見方が可能になるといえるため、今後もさらなる検討の余地が残されるといえる。

引用・参考文献

- Angus, L. E., & Korman, Y. (2002). Conflict, Coherence, and Change in Brief Psychotherapy: A Metaphor Theme Analysis. the verbal communication of emotions Interdisciplinary perspectives Mahvah, NJ Lawrence Erlbaum Associates
- Barker, P. A. (1985) Using metaphors in psychotherapy Brunner/Mazel

- (バーカー(著) 堀恵・石川元(訳)(1996). 精神療法におけるメタファー 金剛出版)
- Flix, G.(1930) *mythologie de la Grece Larousse*
- (フェリックス・ギラン(著) 中島健(訳)(1996). ギリシア神話 青土社)
- 平宮正志(2010). 教育とカウンセリングの視点よりみた日本の詩歌の歴史的一考察—読書療法、詩歌療法、poetry therapyの起源と現状を列記して—二松学舎大学論集, 45-63.
- 堀口真宏(2010). 小学校における特別支援教育支援員の立場から 123, 11-18. ミネルヴァ書房
- 飯森真喜雄(1978). 精神分裂病と詩歌 第1報: 俳句を用いた慢性精神分裂病患者に対する精神療法的接近の試み. 芸術療法,95-103.
- 飯森真喜雄(1998). 俳句・連句療法 三木善彦・黒木賢一(編) 日本の芸術療法. 朱雀書房, pp167-196
- 池田景子(2019). 詩人と西風 —P. B. シェリーの「西風に寄せるオード」 教養研究 Studies of liberal Arts 26(2), 85-96.
- 池田 簾(訳)(1992). ペトルルカ カンツォニエーレー俗事詩片— 名古屋大学出版社
- 高津春繁(著)(1993). ギリシア・ローマ神話辞典 岩波書店
- Levitt, H., Korman, Y., & Angus, L.(2000). A metaphor analysis in treatments of depression: Metaphor as a marker of change Counseling Psychology Quarterly 13, 1, 23-36.
- Mario Castelnuovo-Tedesco(1934). “Zefiro torna, e'l bel tempo rimena: per canto e pianoforte” 楽譜
- 松村一男・平藤喜久子・山田仁史(編)(2013). 神の文化史事典 白水社
- Mazza, N.(1999). Poetry therapy: Interface of the arts and psychology. CRC Press
- Monteverdi, C.(1614). Madrigale Vol.3/I C. F. Peters Musikverlag (モンテヴェルディ: マドリガル(無伴奏混声合唱) 第3集 第6巻)
- 小林稔(訳)(2005). ギリシア物語事典 原書房
- Michael, G & John, H.(1973). God and mortal in classical mythology (西田実・入江和生・木宮直仁・中道子・丹羽隆子(訳)(1988). ギリシア・ローマ神話事典 大修館書店)
- McMullen, L. M.(1989).Use of Figurative Language in Successful and Unsuccessful Cases of Psychotherapy: three Comparisons *Metaphor and Symbolic Activity*, 4, 203-225.
- McMullen, L. M.(2008).Putting in context Metaphor and psychotherapy. In R. W. Gibbs, Jr.(Ed.), *The Cambridge handbook of metaphor and thought*(pp.397-411). Cambridge University Press.
- Niklas, T.(2017). Metaphor in practice: a professional's guide to using the science of language in psychotherapy(ニコラス、T.(著) スティーブン、C.(序文) 武藤崇・大月友・坂野朝子(監訳) 大月友・大屋藍子・上村碧・佐藤友哉・坂野朝子(訳)(2021) メタファー: 心理療法に「ことばの科学」を取り入れる 星和書店
- 大沢忍(1978). パピルスの秘密 みすず書房
- 小山田隆明(2015). 詩歌に救われた人びと—詩歌療法入門— 風詠社
- René, M.(1992). Dictionnaire culturel de mythologie greco-romaine Natham Paris
- (ルネ・マルタン(監修) 松村一男(訳)(1997) 図説ギリシア・ローマ神話文化事典 原書房)
- 立原道造(1937). 第二詩集 暁と夕の詩 風信子社
- 立原道造・中原中也(詩) 三善晃(作曲)(1985). 女声合唱のための三つの抒情 全音楽譜出版社
- 立原道造(2010). 立原道造全集5 筑摩書房
- Jean - Claude(2003). Grand dictionnaire de la mythologie grecque et romaine (ジャンクロード・ベルフィオール(著) 金光 仁三郎(主幹) 小井戸 光彦(他)訳 ラルース ギリシア・ローマ神話大事典(2020). 大修館書店)
- 内田賢徳(2011). 西風の見たもの: 上代日本における中国詩文 萬葉/萬葉学会編輯委員会 編 210, 1-23.
- 梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明(1995). 日本語大辞典第二版 講談社
- 吉田敦彦(監修)(2013). 名画で読み解く「ギリシア神話」世界文化社